

願浄土真実教行証文類序（六）

高田短期大学学長 栗原廣海

一、聞思して遅慮することなかれ

ああ弘誓の強縁、多生にも値いがたく、
 真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまた
 ま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もし
 またこのたび疑網に覆蔽せられれば、更つて
 また曠劫を経歴せん。誠なるかなや、
 撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思
 して遅慮することなかれ。（ああ、強い力で
 往生させてくださる本願力には、いくたび迷
 いの生を繰り返しても値えるのではなく、
 清らかなまことの信心は、どれだけの時を経
 ても獲ることはできない。思いがけなくもこ

の真実の行と真実の信を獲たなら、遠い過去
 からの阿弥陀仏のご縁を慶びなさい。もしま
 た、このたび疑いの網に覆われて真実の行信
 をいただかないようなことがあれば、ふたた
 び果てしなく長い間迷いを続けなければなら
 ないであろう。如来の本願の何とまことであ
 ることか。撰め取ってお捨てにならないとい
 う真実の仰せである。世に超えてたぐいまれ
 な正しい法である。この本願のいわれを聞い
 て、疑いためらつてはならない）

このお言葉の直前に、聖人は、「しければ凡
 小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。（こ
 のようなわけで、浄土の教えは凡夫にも修めやす
 い真実の教えであり、愚かな者にも行きやすい近
 道なのである）」とおっしゃっていました。しか
 し、どれだけ浄土の教えが修めやすい教えであり、

行きやすい近道であっても、真実に背を向けて無

明の闇に迷い、煩惱の炎を燃やし続けている悲し
 い事実に気づかない限り、何度生まれ変わっても
 「まかせよ、必ず救う」の阿弥陀如来の声が聞こ
 えることはなく、本願のご縁に値うことはできな
 いのです。そして、どれだけ長い時間をかけても、
 本願を信じる清らかな心を獲得することはできないの
 です。真実にあうことの困難さを、聖人は『浄土
 和讃』「大經意」に、

如来の興世あいがたく

諸仏の經道ききがたし

菩薩の勝法きくことも

無量劫にもまれらなり（第十八首）

善知識にあうことも

おしうることもまたかたし

よくきくこともかたければ

行ずることもなおかたし（第十九首）

とおっしゃり、浄信を獲得することの困難さを、

一代諸教の信よりも

弘願の信樂なおかたし

難中之難とときたま

無過此難とのべたもう（第二十首）

とおっしゃっています。

このように本願にあうことが難しく、真実信心
 を獲得することが極めて困難であるはずの身が、思い
 がけなくも真実の行と真実の信を獲得ことができ
 たとすれば、お念仏の徳によってそのような身に
 転じてくださった遠い昔からの阿弥陀仏のご縁を
 慶ばずにはおられません。

せっかく阿弥陀仏の強大な本願のお力によって
 真実の行と信を獲得することができたのに、もしまた
 賢しらな自力のはからい心によって疑いの網に
 覆われ、真実の行信を失うようなことがあれば、
 ふたたび果てしなく長い間迷いを続けなければな

らなくなるでしょう。自らに撰め取ってお捨てに
ならない、世に超えてたぐいまれな真実である阿
弥陀仏の本願のいわれをしつかりと聞いて、疑い
ためらうことがないようにしたいものです。

このように述べられて、「序」は最後の段を迎
えます。

二、聞くところを慶び、

獲るところを嘆ずるなり

ここに愚禿積ぐとくしゃくの親鸞しんらん、慶よろこばしきかな、西せい
蕃ばん・月支げつしの聖典しやうでん、東夏とうか・日域じちいきの師釈ししやく、遇あ
い難がたくして、今遇いまあうことを得えたり。聞き難がた
くしてすでに聞くことを得えたり。真宗しんしゆうの
教行証きやうぎやうしゆうを敬信きやうしんして、ことに如来にやらいの恩徳おんとく
の深ふかきことを知しんぬ。ここをもつて聞きく
ところを慶よろこび、獲うるところを嘆たんずるなりと。

(ここに愚禿積の親鸞は、慶よろこばしいことに、
遇い難いインド・西域さいいきの聖典、中国・日本の

やっているのです。

ここで聖人は、獲られた真実の教えを「教・行
・証」とおっしゃり、この教えをたたえるために
この書物を著すとおっしゃっているのですが、実
際にはこの書物には「信文類」も説かれ、「教・
行・信・証」の構成になっています。なぜ聖人は
「真宗の教行信証を敬信して」とおっしゃらな
ったのでしょうか。この問題については、『教
行証文類』の世界」第一回で述べましたが、もう
一度簡単に振り返っておきたいと思ひます。

それは、仏道の枠組みは「教」「行」「証」の
三法で示されるものであるからということになる
と思ひます。前回同様上田義文氏の説を挙げてお
きたいと思ひます。氏は、「念仏往生の教は、単
に既成の仏教界が非難するような邪教ではないと
いうだけではなく、旧来の仏教を超えて、それら
がなし得ないことまでなし得る真の仏教(真宗)、

祖師方の御釈に今遇うことができ、聞き難い
教えをすでに聞くことができた。そして、こ
の真実の法である教・行・証を敬い信じ、こ
とに如来の恩徳の深いことを知ることができ
た。そこで、聞かせていただいたところを慶
び、獲させていただいたところをたたえるの
である)

聖人は、インドや西域の聖典、中国と日本の高
僧方と出遇うことができたことを慶び、聖典に説
かれていた教えや、それらを解釈なさった高僧方
の教えを聞くことができたことを慶んでおられま
す。そしてその教えが「教・行・証」であり、この
「教・行・証」を敬い信じることによって、如来の
恩徳がどれだけ深いものであるかを知ることがで
きたとおっしゃいます。そこで、聞かせていただ
いたところを慶び、獲させていただいた教えをた
たえるために、この書物を著すのでありとおし

いわば仏教中の仏教であるということを主張した
のである」と言い、「もし『信』を入れて『教行
信証』とすると、仏教一般を意味するものとはな
らず、単に浄土宗あるいは浄土真宗を意味するに
すぎないものとなる。それでは大きな努力をして
この書を世に送る親鸞の意図―大乘は一乗であ
り、それは唯だ誓願一仏乗である(これこそが真
の成仏の教えである)―は表現されない。だから
題名は必ず「教行証文類」でなければならぬの
である(上田義文著『親鸞の思想構造』)と結
論されます。首肯すべき智見と言うほかありませ
ん。

以上、八回にわたって『教行証文類』全体を概
観するとともに、「序」の文を通して、聖人がこ
の書を述作されたお心を拝察してきました。

次回からは「教文類一」に聖人のお念仏ご領解
のお心をうかがっていきたいと思ひます。